認定医ケースプレゼンテーション抄録

上顎犬歯欠損に接着ブリッジを用いた一症例

西村 正宏

A Case Report of Adhesion Bridge Applied to Maxillary Canine Defect

Nishimura Masahiro

にて修復することとした。

I. 症例の概要

患者：57歳（補綴科初診時）、女性。

初診：平成9年12月3日。

主訴：右側上顎犬歯欠損による審美、発音障害。

現病歴：平成9年9月に③の違和感を主訴として本学保存科を受診し、慢性根尖性歯周炎と診断され、同部を抜歯された。抜歯後の経過は順調であったが、上記主訴を改善すべく、3カ月後に保存科より紹介され、補綴科初診となった（図1）。

現症：②は口蓋側と遠心にまたがる複合レジン修復が施されており、根管充填、根尖部の状態は良好であった。④はODインレーにより修復されていたが、近心隣接部にエナメル齶蝕が認められた。①①ともに生活歯で、①は近遠心に、①にも近心に複合レジンによる修復が認められた。保存科にて歯周炎のメンテナンスが行われているため、ほかの部位を含めて歯周状態は健康であった。さらに③欠損部への対合歯の挺出や咬合状態に異常は認められなかった。

II. 診断と治療方針

患者は外科的侵襲を好まず、歯の切削を最小限に、審美的な修復を希望されていた。そのため、インプラントや可撤性補綴装置は候補から外れ、支台歯の負担能力を表す係数によって、④③②①の接着ブリッジ

III. 治療内容

④は歯質の削除を最小限に抑えるようインレーを除去したが、インレー辺縁部から内面にかけて2次齶蝕が認められ、口蓋側咬頭に遊離エナメル質を生じたので、やむなく口蓋側咬頭を金属で被覆した。②①はレジン修復部とエナメル質内においてガイドグループを設置した（図2）。ブリッジのリテーナー部にはマックスゴールド®を、陶材焼付け部にはセラミックゴールド®を用い、陶材焼成後には金鑲による後鑲着を行った。ブリッジの装着にはパナビアEX®を用いた。すなわち、支台歯の処理にはリン酸によるエナメルエッチングとプライマー処理を行った。また、メタルの処理にはアルミナサンドブラスト処理後、メタルプライマー®を塗布した。咬合には欠損部に極端に強く咬合しない程度のグループファンクションドオクルージョンを付与後、平成10年1月にブリッジを装着した（図2）。

IV. 経過観察と考察

同部の接着ブリッジを装着後1年間定期的にリコールし、経過良好であった。途中外国滞在時に同ブリッジが脱離したため、一時帰国時に当科にてパナビア21®を用いて同ブリッジを再装着した。しかし、2年半後、患者の帰国時のリコールでは、全顎的に歯周炎が進行し、臼歯部にも動揺が認められ、①部が切縁部より剥離していた。臼歯部での歯周炎が進行したために前歯部の咬合接触が強くなり、①部の切端部の

広島大学大学院医歯薬学総合研究科顎口腔顎部医学講座歯科補綴学研究室

Department of Prosthetic Dentistry, Division of Cervico-Gnathostomatology, Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University

図 1 Panoramic radiography and intraoral view and occlusal views before treatment
大学初診時のパントモ X 線写真と治療前の口腔内写真および模型による咬合診査

図 2 Preparation lines and intraoral views, radiograph just after treatment
支台歯形成ラインとブリッジ装着直後の口腔内写真および X 線写真

薄いメタルフレームから剝離が生じたと考えられた。そこで剝離した①部を除去し、グループ部をコンポジットレジンで修復した。④③②部は適合、動揺などの異常も認められなかったため、咬合調整を行い経過観察とした。4年3カ月後のリコール時にも経過は

図 3 Four years and three months after treatment
治療後4年3カ月の口腔内写真

良好であった(図3)。

一歯欠損症例の補綴処置を選択する場合、固定性ブリッジはインプラントと比べて生体への侵襲が少なく、パーシャルデンチャーと比較しても審美的・機能的に優れた回復ができ、特に接着ブリッジは最小限の歯質削合にて修復が可能のため、当科で高度先進医療にも認められている¹⁾。しかし、正しいリテーナーデザイン、咬合様式を与え、剛性の強い合金と接着力の高い接着性レジンを用い、歯面と金属面の正確な表面処理を行わなければ、脱離する危険性が高い²⁾。また患部のみならず、口腔全体の歯周状態の良好な状態を維持することが、補綴物の長期維持にとって留意すべき点であると思われる。

文 献

- 1) 重頭直文, 浜田泰三. 接着技法によるブリッジ補綴の推移. 広歯誌 28: 269, 1996.
- 2) 熱田 充, 松村英雄, 吉田圭一ほか. 接着ブリッジの脱落率から見た現状と課題. 補綴誌 41: 874-880, 1997.